

序 文

3月11日にテレビに映された東日本大震災の津波映像は衝撃的であった。大津波とともに、マグニチュード9.0、2万人近い死者・行方不明者、福島第1原子力発電所の燃料棒溶融と水素爆発事故など、東日本大震災は日本の防災への取り組みを根幹から揺さぶることになった。自然の凄まじいエネルギーの爆発を前にして、各地方自治体は地域防災計画を根本から見直す動きを始めている。

また、9月の始めに高知に上陸し、四国地方と中国地方を抜けて日本海に出た台風12号は、紀伊半島に記録的な豪雨をもたらした。そして、死者・行方不明者110名(9月11日時点 内閣府調べ)という犠牲者が出た。一つの台風で犠牲者が100名を超えるのは、1979年の台風20号以来のことである。

今回のような豪雨を四国の住民は既に経験している。平成16年の7月末から8月頭にかけて、今回の台風と同様な進路を辿った台風10号は、徳島の山間地に連続雨量2000mm、日雨量1000mmを超えるという異常豪雨をもたらした。大規模崩壊や土石流が多く発生したが、幸いにも人的犠牲は少なくて済んでいる。台風10号の豪雨は高知から日本海に抜けた台風が日本海で停滞し、その台風に向かって雨雲が徳島県の山間地を通り続けたことによる。

伊勢湾台風の高潮で名古屋が水浸しになり、5000名近い方が亡くなってから50年が経過した。この間、日本政府は災害対策基本法を制定し、防災対策に力を注いできた。その取り組みの成果もあり、自然災害による犠牲者は激減した。しかし、1995年の阪神・淡路大震災、そして、今回の東日本大震災と、日本は「コンクリートから人へ」だけでは御しきれない国であることが明白になった。

造山帯に位置している上に、アジアモンスーン地域にあり、台風被害には事欠かない。地震、火山、台風、大雨などの自然災害を引き起こす素因に充ち満ちた国である。しかし、これらは負の要素ばかりを提供しているわけではない。起伏に富んだ地形からなる豊かな自然、緑に溢れた豊かな生態系、はっきりとした四季の移り変わりなど、世界に類を見ない美しく、豊かな自然が、日本人特有の感性に溢れた精神を育ててきた。自然に育まれた豊かな感性は、茶道、花道、能、歌舞伎、俳句、短歌、日本画などの世界に冠たる日本文化を形作ってきた。また、家族主義に代表される思いやり深い精神性や、被災時に助け合う地域の協調の精神も同時に育ててきた。

また、人間の力を遙かに超えたエネルギーの爆発による相次ぐ自然災害は、日本人の精神に無情感を育てた。鴨長明の方丈記には、「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」と記されている。

自然災害は、日本人の精神性や家族や地域のあり方にまで大きな影響を及ぼしてきている。しかし、これから私たちが遭遇するであろう「関東直下型地震」や「東南海・南海地震」などは高度に発展した日本の大都市が巨大地震に襲われるという戦後の日本に

とって最大の危機となる。その巨大災害に備えるために残された時間は多くない。防災に携わる官民学ならびに市民が力を合わせて、知恵を結集して災害に強いまちづくりに取り組まなければならない。

今回、愛媛県下の市長や町長の参加を得て、えひめ防災フォーラム2011―東日本大震災からみた東南海・南海地震への対応―が開催されたことは、愛媛県の今後の防災・減災を考える上で大きな取り組みの一步と言える。気候が温暖で災害が比較的少ない愛媛県も、地球温暖化と地震の多発期を迎えて、今後は安穩としてはいられない。多くの方が本書を読んで、愛媛県の防災について考える契機としていただきたい。

2011年9月

愛媛大学防災情報研究センター長

愛媛地域防災力研究連携協議会長

矢田部 龍一